

2000年2月 奥信濃の冬

七〇才は「古希」というが、今の老人には実感が薄い。「還暦」も暦の問題と片付け、暦は生活に入っていないから、実感は今この世の習いの「還暦」イコール「定年」に絞られる。

この理屈なら「古希」は何ら問題がない。経過点の一つである。ところが問題は思わぬところからきた。七〇才になると、残りが急に意識に登ってきたことである。私一人かと思っただ、それを言う友人がいて、今かなり普遍的と思っただよさそうである。

残りとは何を基に計るか、死は未だ遠い。八五か九〇才を思っただよさそうである。ボケは八〇まで待ってくれそうである。それより機能劣化で社にいる人を多く見る。

残りは五年なのである。

会性を失う、その怖れの始まりの年が七五才だと、私は思う。多くの老人で、関心の事物が減り、社会との接触が面倒となり、以前には考えられぬ身体機能の変調が、私の判断では、七五才くらいから始まる。いや始まっ 私は家族からの古希のお祝いを喜んで受けることとした。そして行く場所を、好きな奥信濃と決めてもらった。

二月二〇日（日）晴れ

東京は曇っていた。この程度なら長野まで無事に行きそうである。運転は景、私が助手席に座る。雪の道を予想しなければならぬし、車での長野高速に経験はない。難所は軽井沢と上田周辺ときいたから、走行時間と運転者の声の調子で、適当な場所で交替を決めなければならない。

関越には問題はない。上信越道に入ると車が急に減る。初めての道で、地図での位置確認に追われながら下仁田を通過して、妙義山の麓に入る。

この一帯は入ったことがなく、碓氷峠の登りから連想はしたが、登りの程度は大分楽だった。まだ雪はない。左に妙義が大きく現われる。上毛三山の内、ここだけは従来姿を見せなかった。妙義の山容は凹凸が激しく、岩が多いこともあって、人を寄せ付けない。かつてここで連合赤軍の若者が訓練し、互いを殺しあつた。あの時、われわれは戦後の高揚感に挫折を感じ初めていた。暗さの中に未来を求める人々もいた。夢で現実から逃避する、オウム世代より一世代前である。

この山なら耐えて未来をみる試みを鍛えるに相応しい暗さである。現実直視、しかし彼らは耐えきれず他を抹殺する、悲惨な道を選んだ。暗い、苦い過去だと、古希の老人は思う。

こんなに近くを自動車道が回ると、これからはもっと身近な山になるだろう。異様な凹凸は不気味さを捨てて景観の一部と化そう。

軽井沢のトンネル群を越え、佐久平パーキングで休憩する。山の中腹を蟻のように人が上下する。スキー場なのだ。八ヶ岳からの冷気がここで山にぶつかり、雪と化すようだ。

パーキングは小型だが、必要なものはある。景が奇妙なきのこのお菓子を買ってきた。大手メーカーが各県ごとに、そこだけで売的商品とか、ここは長野である。

上信越道は軽井沢と上田に大きなトンネル群をもつ。言われぬことだが、この間三〇キロ余は天国である。視界は広いし、道には程よいカーブがあり、車は少ない。小諸、湯ノ丸、上田の出口がある。

初めて上田のトンネル群に入る。亮の運転で、注意して、という。対向車のライトはまじかなのに、殆ど直線である。光の列に向かっていく感じがする。太郎山と五里が峯の二つが主だが四〇〇〇メートル級なのだ。

長野平からは平凡で、眠くなりそうだ。信濃町が近付くと少し空が明るくなってきた。雪はところどころで出会ったが、気にするほどではなかった。飯山の豪雪地帯を通るのだから当然だが、除雪車が何時も動く。

信濃町インターからの山並は素晴らしい景色である。妙高、黒姫、飯綱、背景として戸隠と、天下の名山が並ぶ。そこの「道の駅」は恐らく全国のベストテンに勿論はいるだろう。但しそれは景観の話で、食堂の料理は駄目だ。雰囲気も値段の内とすれば、ここは何時も空いているから、景観分も含めて大変に安い。全体がガラスの窓から、黒姫は霞んでいたが、妙高はよく見えた。駐車場は雪であり、

妙高も雪を被っている。冬の陽がうっすら辺りを包む。雪が少ない年のせいか、妙高も白が斑に見える。飯綱と霊仙寺の奥に戸隠もの覗きだした。黒姫から雲がどいて、全員が揃った。子供たちもはしゃぐ気を起こしたらしい。

駐車場は雪がかいてあったから、このままチェーンなしで行くか、と出発したが、列車の線路までも行かない



内に無理と知り、もどってチェーンをはめて出発。少し回り道をしたが、無事六花舎につく。歓迎を受けた。長い旅ではあったので、今日は出ない。夕食でお祝いのワインをいただき、記念撮影。そして例のアルテックのA7を聞いてゆっくり休んだ。



念撮影。そして例のアルテックのA7を聞いてゆっくり休んだ。

2月22日
(月) 雪
冴えない、いやこれが当たり前なのだろうが、そんなに美しく

くない雪景色である。今日は滑ると子供達は意気込むが、こちらはどうして一日を送るか迷う。先に子供たちがでる。我々はゆっくりして、昼食をスキー場でとる予定で出る。リフトの周辺なら滑る姿でも見られるかと思っただが、大変な混み様で、そんな楽にはいかなかった。落ち合う予定の場所に彼らはこない。30分たっても表れないので、我々だけの食事となった。ホテルは黒姫スキー大会の合宿所になっているらしく、並みの混み方ではない。

酸素濃度が落ちているのではないかと、思う程だったし、それにこういった場所独特のエゴイズムで、忙しくて、長いする気持ちにもなれない。2時間ほどで退場しようと、思ったところ

で、子供達に出会った。

今回も六花舎は静かである。奥さんの兄上の家族がいたが、それも今日は帰った。また専用になった。お喋りをしながら音楽を聞く。この夫婦は格別の人生感をもっているようだが、それが素直で、他人の邪魔をしない。東京の出だし、まだ都会に愛着は感じているけれど、これ以外にどう仕様もないことを知っている。初めて会った数年前より、気分がづっと落ち着いているのがわかる。

夕方近く、スノーボードをたっぷり楽しんで帰ってきた子供達に一苦勞を頼んだ。この古くから知っている土地をざっと眺めた見たかった。運転で近隣のドライブにでる。いかんせん雪道であり、亮の荒い運転に頼らざるをえない。

赤倉を目差した。途中池の平あたりで薄暗くなり、諦める。池の平には東大の寮もあり、



沢山の思い出が詰まっている。そこを探すためイモリ池周辺を探してもらったが、わからない。雪が深くて大きな道にしか入れない。暗くなり始め、雪の反射で浮かび上がる新しい町並みは、古い思い出をも浮かび上がらせる。東大の寮に泊まったのはっきり覚えているのは67年。谷村君が結婚して純ちゃん

が出来たころ教室員と一緒にだった。68年和美ちゃんがママつきで我々の仲間に加わりきた。これはここか共済か、何処に泊まったか覚えていない。もう一度独身時代の一人旅行で、年月の記憶が定かでないが、大変きれいな共済（今は池の平しかない）に2泊したら、2泊目に全く同じおかずだったのが印象に残る。67年10月に清瀬に転居、一人暮らしを始めたから、この頃までの出来事だろう。その後は紛争などで、余裕を失った。

今思うと65年から67年は青春末期だった。一人旅を繰り返した。

64年に能登、京都に13泊の旅、これは前向き。

末期の旅は65年8月（35才）に始まったと思う。先ず清里へ去年の思い出を再確認、そこから飯田線経由で豊橋（台風で東京経由）、伊良湖崎と5泊の旅行、この時は坂口さん宅に宿泊の約束があつてこうなる。66年初春久々10年振りに人を映画に誘った。66年春の大旅行10泊は学会後、九州から四国の一人旅。66年8月、木曾から上高地、乗鞍、青木湖、そして飯綱と7泊の大旅行。この時知合った、島崎さん、北村さんとは今も連絡がある。更に三宅島へ行こうと計画をしていたが、台風で延期になった。丁度その時助教昇進の人事が伝えられた。

西尾君（66、4）、西山君、谷村君、島村さん、ホウさん（67、5）など親しい知人の結婚が66～67年に相次いだ。私は未だこの頃結婚はすべきものと思っていなかった。しかし意識しなくても圧力として感じていたに違いない。それが挙動に現われていただろう。身近に対象となるような女性もいたから、彼女らには迷惑をかけていただろう。71年1月の結婚以後、中野を含め、この地を訪れた数は多い。何より印象が強いのは81年早春、佐藤茂君馴染みの民宿が残る。今、近代的ホテルやペンションが並ぶが、あのパークロッジ関根の素朴な感じが懐かしい。昼のスキーでコテンパンにやられ、渾一の世話になったが、夜おそくまでご夫婦と囲炉裏を囲んで話したのがあとに残る。奥さん（安子）が表現力豊かで、話題が付きにくい。今でも思い出すのは、多産の家族のことを



「奥さんの子宮がしっかり旦那のを包んで精液を逃さないのだは」と表現したことだ。こんな写実的な言いようは会話で聞いたことがない。しかもそれを少しも嫌味なしにいった。私は以後あの奥さんが懐かしく思えたが、とうとう訪ねる機会を無くした。今度は池の平寮の位置さえ、確認出来なかったから、ロッジ関根の跡など、見付ける由もない。夕食はまたワインが出て、子供たちはいい気持ちになった。早く寝室に入って出てこなかった。私一人ご主人とレコードを聞いた。ここの音は前に出てくる。天井が高く、部屋が広いこともあって、余計な残響がないのだろう。聞き入る気持ちになる。雪は降っていないようだった。

2月23日（火）雪

美しい雪である。明るいのに雪が振る。カラマツを背景とした、その様を窓から眺めているだけで、気持ちが和ぐむ。遊びの冬の旅は覚えがない。雪が風景の一部になっていて、そこに自分がとけこむ。自分は暖かい室内にいるから、雪とは馴染んでいない。それなのに雪の中にいる気持ちになる。夏なら普通に起こる出来事であるが、とても不思議な思いになる。六花舎の主人が次々CDをかけてくれた。そのなかの一つに、パン・フルートとオルガンの曲があった。二つの楽器が溶け合っている。オルガンが密やかに曲想と奏で、フルートがそれを確認し、聞くわが胸に魂が送りこまれる。魂は雪の精か。純潔で淡く、はかない。パン・フルートはJ・C・マラ、オルガンはG・ベルスとCDケースにはあった。発売は女子パウロ会、高橋たか子の本を出している会である。



景がすばらしい表情で帰ってきた。雪にまみれ、目もあかない。二人ともエクサイトしていたのだろう。声が弾む。中田さんの誘いがあり、急いで着替えて車で出なければならなかった。お客としてわがまま三昧なのに六花舎の夫妻は暖かく送り出してくれた。

パワフル健康食品の工場までの道は雪の中だった。荒涼というには明るさがありすぎるが、道は雪のなかである。ラッセルが走っているので通行には支障はないが、矢張り、方向感覚は鈍る。何度か携帯電話で連絡をとり、無事工場についた。ここからは中田さんの車にのる。ベントは何事もないかのように、雪の山道に入って行った。飯山妙高高原線を行ったのだと思う。上水内郡の三水村を通過して下水内郡に入ってまもなく車は止まった。大変な雪であり、豪雪地帯として知られるのがわかる。涌井というところだったと思う。「蕎処涌井せんたあ」という面白い看板があった。



勿論中田さんの知合いで、信州で二番目に上手いそば屋という触込みだそう。勿論一番は無数にある、というのは分かっていないの代名詞。面白いネーミングである。大きな笹に一杯の蕎麦が運ばれてくる。如何にも田舎の表現だが、これが結構美

味しい。しっかりしている。蕎麦をつゆで食べる人にとっては塩辛いかもしれないが、蕎麦の風味は十分である。好い加減食べたと思ったとき、また新たな一策が来た。亮でさえスピードが落ちる。

大雪で埋まった「涌井せんたあ」から同じ道に戻って工場についたが、もう大分の時間だった。中田さんに信濃町のインター近くまで送って貰い

ガソリンを入れ、高速に入る。中野近くになると雪は急速に減っていく。涌井とは直線では一キロと離れていない。バスの停留場を見付けてチェーンを外し



ていたら、何ということかバスが来た。日に何本かに当たったのだろう。亮の運転で上田のトンネルを越える。軽井沢の前に交替を言ったが、大丈夫の返事で、横川のパーキングまで来てしまった。流石の亮も少し草臥れていたようだった。ここは山の中で薄暗い。しかし下りより大きく、釜飯も売っていた。買う。一息入れて景の運転に変わった。関越に入ると明るくなる。遠く夕焼けさえ見えた。

こうして私の七〇歳台は始まった。

